

くらしと協同をたずねて

環境生協から NPO 法人へ ～ NPO 法人碧いびわ湖の事業と運動

下門 直人 (京都大学大学院経済学研究科博士後期課程)



はじめに

1977 年、琵琶湖で赤潮が発生したことを契機に市民の間で展開されたせっけん運動は、多くの住民や行政に影響を与えた。この環境運動から世界で唯一の環境生協が設立された。しかし、2009 年に環境生協は NPO 法人へと転換された。なぜ碧いびわ湖は環境生協から NPO へと法人格を変更したのか。

本稿では、NPO 法人碧いびわ湖の代表理事の村上悟氏への聞き取り調査をもとに、碧いびわ湖の活動を紹介する。そして NPO 法人へと転換したことの意義や現状の課題についてみていく。

「せっけん運動」から 環境生協設立へ

(1) びわ湖とせっけん運動

今から 40 年ほど前の 1977 年、滋賀県の琵琶湖で大規模な赤潮が発生し、琵琶湖の水質悪化が問題になった。主な原因は生活排水や工場排水であり、そのうち家庭用の洗濯洗剤として使用されていた合成洗剤に含まれるリンという物質が要因の一つとして挙げられた。当時、琵琶湖の水質悪化により琵琶湖周辺は悪臭が漂い、琵琶湖を水源とする生活水は茶褐色になるという事態まで生じた¹⁾。

赤潮の大規模発生を契機として、住民の間で琵琶湖の水質問題や環境問題が自分たちのくらしに直結する問題として受け止められた。そうした流れの中で、滋賀県民が主体となって使い慣れた合成洗剤の使用をやめ、環境負荷の小さい粉石けんを使う取り組みが進められ「せっけん運動」へと発展した。せっけん運動が県内で高まっていく中で、滋賀県はリンを含む家庭用合成洗剤の使用禁止や工場排水の規制などを定めた「滋賀県琵琶湖の富栄養化の防止に関する条例 (琵琶湖条例)」を 1980 年に施行し、翌年の 7 月 1 日を「びわ湖の日」として制定した。

(2) 環境生協設立の背景

琵琶湖の水質汚染問題は、市民の日常生活における消費者としての活動が環境に対して加害者の面を有しているという意識を市民の間に形成した。つまり赤潮の問題は単に琵琶湖の水質汚染問題というだけにとどまらず、市民のくらしと環境問題として考える契機となった。

せっけん運動が盛り上がりを見せる中、様々な市民団体や組織によって環境問題に対する取り組みが行われていた。後の滋賀県環境生活協同組合の母体となる湖南消費生活協同組合 (湖南生協) も環境問題に積極的に取り組んでいた組織の一つである。

湖南生協では一市民である組合員が環境に対して加害者となる面を最小限に抑える

ため、一人でできないことをみんなでやろうというスローガンのもと、せっけん運動やリサイクル事業が積極的に展開された。その際、赤潮問題を合成洗剤のリンの有無に帰着させずに自分たちのくらしに結び付けて考えることで、家庭や仕事、地域、環境、政治といったものを含め包括的に問題意識を持ってもらうことを意識した。リサイクル事業は廃食油を回収し、石けんにして供給することから始められた。今までゴミと認識されていたものを資源として捉え直し、物質的・経済的に地域で循環させることを自分たちの生活基盤を整えながら実践していくことが目指された。

また1980年代に入ると琵琶湖にアオコが発生し、それを機に湖南生協では水環境の学習会を実施し、合併浄化槽の設置が推進された。

このような湖南生協時代のせっけん運動やリサイクル事業、合併浄化槽普及事業を基盤とし、1989年に全国で唯一の環境専門生協である滋賀県環境生活協同組合（環境生協）が設立された。

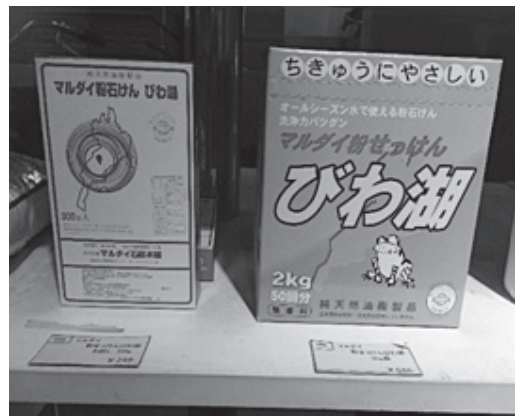
(3) 環境生協時代の事業内容

環境生協は湖南生協時代の事業を引き継ぎつつ、①合併浄化槽の普及事業、②リサイクル事業、③エコロジー商品普及事業、④ソフト事業の4つの事業を柱として活動してきた。これらの事業を通じて「生活を手作りすること、つまり与えられたもの（商品として購入したもの）を使うだけでなく自ら作ることを通じてより良いくらしが目指された。

合併浄化槽の普及事業は、当時水質汚染の原因の一つである家庭排水（台所、風呂、洗濯、洗面所などの排水）が多く地域で垂れ流しとなっており、し尿と雑排水を同時に処理する合併浄化槽を各家庭に設置す

る事業であった。水質汚染に対して自治体は下水道整備が推進されていたが、下水道整備は環境問題に対する関心の希薄化を招き、また将来的な維持コストや災害に弱いという理由で環境生協では合併浄化槽の設置運動を実践していた。

リサイクル事業では、家庭から出る廃食油を回収して作った石けんの供給や牛乳パックを回収して作ったティッシュペーパーやトイレットペーパーの供給をおこなっていた。廃食油から作られた石けんの使用を推進することで合成洗剤から粉石けんへ切り替える運動はせっけん運動の典型的な一例であったⁱⁱ⁾。この事業は碧いびわ湖へと転換してからも継続されている。



環境生協時代から供給されている粉石けん

エコロジー商品普及事業は水、緑、土、大気、エネルギーの5部門に渡ってエコロジー商品を独自に開発し、供給する事業であった。この事業で粉石けん、液体せっけん、浄水器、再生紙、名刺、ノンフロンガス・スプレー、太陽熱利用温水器など約30品目の商品が開発されたⁱⁱⁱ⁾。当時、西ドイツでは商品の評価に環境基準が付け加えられるようになり、環境負荷の少ない商品はエコラベルの先駆けである「ブルー・エンジェル」に認定される制度が始まって

いた。環境生協ではブルー・エンジェルマークを参考に独自にエコロジー商品の開発が進められた。また、環境負荷の少ない商品の購入・消費を通じて環境問題に取り組む「Shopping for a better World (買い物で世界を変える)」を実現する社会的仕組みをつくろうとした。

ソフト事業では生活スタイルを見直していくことを各家庭や個人の自主的な運動にとどめずに、地域で学びあって普及させていくことを目的に環境教育や普及教育が実施された。具体的には石けん作りや紙漉きの実演、環境問題についての講演などを各地で行う事業である。

環境生協時代はこれら 4 つの事業を通じて琵琶湖の水質汚染問題やより幅広い環境問題に取り組む運動を実践してきた。

しかし、消費生活協同組合法によって活動範囲や内容が規定される環境生協という法人の在り方が、事業を通じた環境問題への取り組みを広めていこうとする活動実態と徐々に合わなくなり、環境生協から NPO 法人への法人格の転換が図られることになる。

環境生協から 碧いびわ湖への転換

(1) 碧いびわ湖の概要

NPO 法人碧いびわ湖は滋賀県環境生活協同組合の全事業を継承して 2009 年に設立された。2013 年度の会員数は 94 人、共同購入の個人利用者数は 532 人、法人利用者数 131 事業所となっている^{iv)}。主な活動内容は環境生協時代から継続されている共同購入事業とリサイクル事業、合併浄化槽の普及事業から発展してきた住まいづくり事業である。また碧いびわ湖となつてから

親子や地域との交流を通じた学習会や活動も行われている。

表 碧いびわ湖の活動実績の一部 (2013年)

グリーン購入 (共同購入) 事業	
再生ティッシュ供給数	5,716袋
再生トイレロール供給数	11,056袋
再生粉石けん供給量	5,815 kg
住まいづくり事業	
雨水貯留槽設置	28件
太陽熱温水器設置	17件
リサイクル事業	
廃食油	14,930 kg
牛乳パック	361,580 kg

(2) 碧いびわ湖の事業内容

碧いびわ湖の事業は基本的に環境生協から引き継がれているが、「くらし」という文脈からエネルギー問題や環境問題などを身近な問題として捉え直し、生活者に価値を提供することを目指した事業構成となっている。すなわち、環境に優しいというだけで普及を促進するのではなく、生活の中での使いやすさや利用しやすさも丁寧に考えられた事業を展開している。

具体的には①共同購入事業、②リサイクル事業、③住まいづくり事業、④地域づくり事業の 4 分野から構成されている。

住まいづくり事業では雨水や太陽熱、薪などの身近な自然を活かした暮らしを実現するための住まいづくりを提案している。具体的には生活で利用する水に雨水を利用するための貯水タンクの設置や太陽熱温水器の設置、薪ストーブの設置などである。

雨水は一般的に想像されているよりもきれいであり、洗濯やトイレ、風呂、台所などいたる場面で使用することができる。雨水は超軟水であり、石けんの泡立ちもよく、

雨水で洗濯すると粉石けんの問題点である石けんカスが残らない。環境に良いという理由で粉石けんを推奨するだけでなく、同時に雨水を利用することで石けんカスの問題を解決することができることも提案している。また大型の雨水タンクは中古品を購入し自ら手入れをすることでコストを抑え、経済的に導入しやすいように努力がなされている。



水道水と雨水で泡立ちが大きく異なる様子



250Lの雨水貯水タンク

共同購入事業では、環境生協時代に供給していたエコロジー商品や新しく開発した碧いびわ湖のオリジナル商品が供給されている。主にリサイクル事業で回収された牛乳パックや廃食油で生産したティシュペーパーの「おかえりティシュ」やトイレトペーパーの「ただいまロール」、液体石けんの「ゆう」などが供給されている。

おかえりティシュとただいまロールは牛乳パック回収団体と再生紙メーカーと共同で開発した市民ブランドとなっている。また両者の価格は一個につき1円の基金が含まれており、それと同額を再生紙メーカーが寄付する仕組みとなっている。この基金は牛乳パック回収事業の補助として使用されている。

また、地元産のお米も供給しており、その中には会員が生産したお米もある。



回収された牛乳パックを原料に生産された「おかえりティッシュ」



廃油から作った碧いびわ湖のオリジナル液体石けん

リサイクル事業は廃食油と牛乳パックを回収し、共同購入事業で供給する商品生産のための資源回収という位置付けとなっている。

学習・交流事業では、子どもと大人が自然の中で一緒に遊んだり活動したりする場を通じて環境について考えてもらえるような企画や活動を実施している。具体的には 2013 年に栗東市の里山に親子で遊べる「たまたまばやし」を整備し、守山市の目田川で子育て広場を始めた。またこうした交流で形成された人間関係を大事にし、一緒に活動に取り組んでくれる人の輪を広げていくことを進めている。

また、講演依頼を受けることや自治体や他の団体との連携づくりを進めている。

(3) 生協から NPO 法人への転換

環境生協から NPO 法人へと法人格を転換した理由は、消費生活協同組合法（生協法）では活動実態に合わないとの判断があったためである。それは共同購入の利用者のうち法人の割合が大きく、リサイクル事業は企業向けの事業であった点。組合員

と経営側が高齢化していた点。講演を依頼されても地域外で活動することが困難であった点などが挙げられる。

このような事情のもと環境生協の積極面を引き継ぎながら、新しい形の運動として展開しやすい NPO 法人へと転換を果たした。

顔の見える関係を大切にした事業展開

碧いびわ湖の活動に参加する人々は小さい子どもがいる母親が多い。特に 3.11 後は自分たちが使うエネルギーや環境問題に対して関心を持つ人が増えてきており、学習・交流事業でのコミュニティづくりを通じて着実に活動の輪が広がりつつある。ただ活動の輪の広がり方は環境生協時代と異なっている。

母親たちは、正義をかざして相手を説得しようとするのではなく、相手の意見や考えも尊重し、共に考える姿勢を大切にしている。野外での子育てを一緒にしたり、心配事を語りあったりすることでまず信頼を形成し、信頼が形成された中から自分たちにできることを少しずつ実践している。碧いびわ湖は事業体としては小さいが、こうしたスタイルで顔の見える関係を重視し、共感によって活動の輪を広げている。そして、共感によって広げられた人間関係の輪が運動の土台となっている。

展望と課題

碧いびわ湖は環境生協から NPO 法人へと転換することで生協法に縛られずに活動できるようになった。そしてより重要な点

であるが、人々の顔がわかる関係を基礎にして活動が広がっていることが碧いびわ湖の強みである。行政や他の大規模な団体・組織にはできず、碧いびわ湖にできることがあるはずである。今後の課題について村上氏に尋ねると、多岐にわたる事業・活動のマネジメント体制を整えること、職員の労働条件を向上させることを挙げた。碧いびわ湖の事業は運動としての側面も持っており、事業と運動のバランスを取りながらその活動を着実に広げている。今後も活動が発展していくことを期待したい。

-
- i) 『『びわ湖の日』30周年 未来につなごうびわ湖の恵み 今、私たちにできること』『滋賀プラスワン』平成23年7・8月号、滋賀県広報課
 - ii) 『環境生協加入のご案内』滋賀県環境生活協同組合
 - iii) 同上
 - iv) 特定非営利活動法人碧いびわ湖 2013 年度活動レポート



碧いびわ湖代表理事の村上さん



碧いびわ湖の事務所